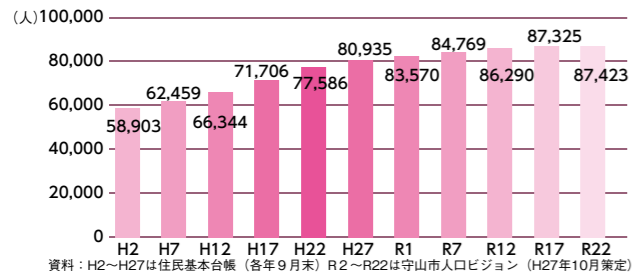




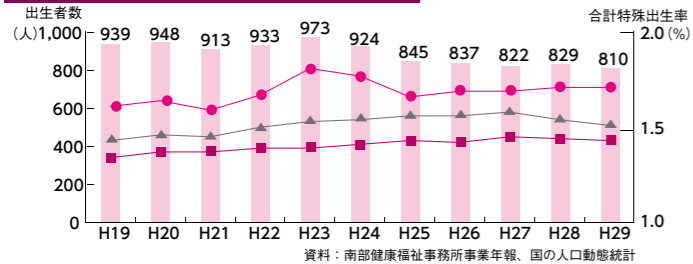
本市を支える多様な市民

市の人口推移



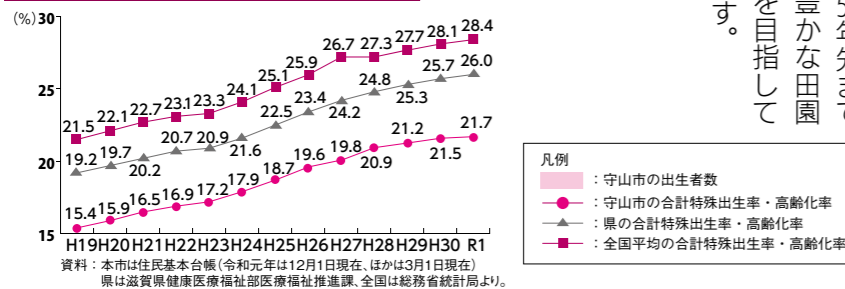
資料：H2～H27は住民基本台帳（各年9月末）R2～R22は守山市人口ビジョン（H27年10月策定）

出生率の推移と市の出生者数



資料：南部健康福祉事務所事業年報、国の人口動態統計

高齢化率の推移



資料：本市は住民基本台帳（令和元年は12月1日現在、ほかは3月1日現在）県は滋賀県健康医療福祉部医療福祉推進課、全国は総務省統計局より。



観光客入込数(日帰り・宿泊含む)

市統計書 昭利59年 508,000人 → 県観光入込客統計調査書 令和元年 1,361,000人



一戸当たりの経営耕地面積

市統計書 昭利45年 78.8a → 農林業センサス 令和2年(概数値) 186.3a

琵琶湖大橋ができて以降守山の交通量が増え、さらに佐川美術館やファーマーズマーケットおうみんちなど観光スポットもでき、観光客も増えました。近年は、琵琶湖の眺望と平坦な地形から、なぎさ公園にサイクリストの聖地碑を建て、ピワイチ(びわ湖一周)の発着点として注目されるようになっていきます。

守山の農業はお米を主とした経営が主力でした。しかし、野洲川改修による畑の増加や後継者不足、農業制度の変遷などで本市の農業も変わってきました。モリヤマメロンや花など収益性の高い作物がブランド化されたり、新しい農業に挑戦する若手の就農や法人化など、時代や消費者ニーズを意識した経営が増えました。

伸び続ける人口

市制施行から50年、次のステップで目指すもの

利便性と原風景の共存が特徴 住みやすさを実感できるまち

起伏の少ない平坦な地形で古くから穀倉地帯として栄えた、のどかな風景。暴れ川と呼ばれ

市民協働で目指す まちの未来

都市「豊かな田園」を目指して

よりやや低いので、少子高齢の波は比較的緩やかですが、将来的には比較的同様に人口減少に転じていくことが予測されます。

た野洲川を人々の記憶と歴史に留めながら、安全で穏やかな新しい川の眺望が、今ではまちのランドマークとなっています。緑の多い原風景的なまちの豊かさや利便性が高い暮らしの豊かさの共存が、守山の特徴といえます。

市制施行から50年、行政と市民の連携による知恵と努力で今日の本市があります。これからも、行政と市民の知恵と努力を重ね、50年先まで続く「豊かな田園都市」を目指していきます。

特集 未来の守山を考える

過去・現在・未来へ 受け継がれていく絆



3世代が集まった杉田さんご家族

左から 守さん、英子さん、心々さん、恭子さん、葉夏さん、莉彩さん、ゆりさん、瑛磨さん、奈穂さん、知也さん、沙咲さん

すぎた まる ひでこ 杉田 守さん、英子さんのメッセージ

結婚して40数年——。結婚当初に、まだできあがっていない野洲川の堤防を散歩したことを思い出します。今は毎晩子どもや孫たちとご飯を食べ、パーティーのようににぎやかです。孫の成長も楽しく、一緒に暮らせることをとてもうれしく思っています。

守山市の総人口

広報もりやま 昭和45年7月号 35,112人

広報もりやま 令和元年7月1日号 83,905人

本市は令和2年7月1日に市制施行50周年という節目を迎えました。市制施行50周年の年に、新型コロナウイルス感染症という災いに見舞われ、予定されていた記念式典やイベントは延伸しました。しかし、この50周年は連年と続いてきた歴史の節目に過ぎず、迎えた今日は先人より受け継いできたものです。喜びや苦労、さまざまな営みは、未来の50年、100年へと続く本市の歴史の1ページとなっています。 今回の特集では、市制施行50周年にちなんで、過去から現在、未来へと紡がれていく時間と絆を取材しました。



イメージ

伝統文化の生け花で 市内初の女性起業家

24歳で初めて自分の教室を持ったよしゑさんは、クリエイターとしての創作や生け花の普及に精力を注ぎ、枠をはみ出して、しぎたりの壁にぶつかってしまいました。しかしその後、華佑会の名でグループを立ち上げ、およそ6年をかけて池坊の支部に成長させました。

仁さんは幼い頃に見ていたそ

子どものころに読んだ松下幸之助氏の伝記。大好きだった『ドフエもん』の漫画。通っていた剣道場で身についた「壁を乗り越えた先に勝利がある」との教え。厳格な父、情熱的な母、歳の離れた兄2人の家族。

上原家族の日常が 企業経営の原点に

仁さんが東京を拠点に経営する企業は念願の株式上場を果たしましたが、その原点は守山で過ごした日々にあるといいます。

1000年続く会社へ 伝統と花の残るまちへ

母は華道家、息子はIT企業経営。一見すると関係がないように思えますが、ふるさと守山が育んだ「信念と情熱で壁を乗り越える克己の心」が、よしゑさんと仁さんの共通項でした。

仁さんによると、守山市は若い事業家や起業家をつなぎ育てる良いコミュニティができているので、まちの将来は有望とのこと。

仁さんは「企業は社会に新しい価値を生み出してくれるもの

経営者の原点を育んだふるさと守山 道は違っても心の在り方は母から子へ

母の上原よしゑさんは、市内で伝統文化の生け花を教える先生。息子の仁さんは東京に住み、最近一部上場を果たしたIT企業経営者。一見すると接点がないように見える母子ですが、ふるさと守山で育んだ「信念」と「情熱」、「克己の心」という、見えないけれど確かな絆で結ばれていました。



経営する会社はIT関連ですが、情報技術(インターネット)は仁さんにとって、ドフエもんの「どこでもドア」。会いたい時に会いたい人に会える、人と人をつなぐ夢の道具に思えるそうです。

私も自分の会社を1000年続く企業にすること、私が育ち母の住む守山を応援していく情熱と克己の心で前へ進む華道と企業経営の共通項

上原 仁さん(息子) 株式会社マイネット(東京)

ことを目標に、これからも情熱を燃やしたい。よしゑさんは「華道という伝統文化が1000年先まで息づいて、花々が身近にあるまちであってほしい」と願っていますと未来への夢を描いていました。

兄の國枝 武夫さんは、欲賀町・十二里町地先で全国でも最大規模のバラ温室で切り花の栽培をしている生産農家。弟の啓司さんは、杉江町の温室で「和ばら」ブランドのバラ品種を開発する育種農家。バラ農家という呼び方は同じながら、別の方向に歩いている兄弟ですが、そのルーツと描く未来の夢は、一本の道でつながっていました。

誰よりバラが好きだから楽しんで努力 夢見る未来は家々に飾られた花のまち並み



國枝 啓司さん(弟) ローズファームケイジ

弟も別の方向に進んだことで、かつてバラの話をするのが増えたかもしれないと話していました。

親父の背中は今も大きい 父ゆずりの先見と挑戦で拓いた道

武夫さんと啓司さんは、異口同音に「誰よりバラが好きだから一生懸命楽しんで努力する。父から息子へ、また次の後継者へとつながっていくのかもしれない。50年先の未来に望むのは、家々に鉢植えや切り花が飾られている欧州のような風景と家並みを、守山に見ることで」と夢を語っていました。

國枝 武夫さん(兄) クニエタ株式会社



武夫さんと啓司さん兄弟の父、國枝 栄一さんは、金森町の仲間建てた温室団地でバラの栽培をはじめた先駆者でした。水稲栽培もしていた両親はいつも忙しく、幼い啓司さんの面倒は、歳の離れた兄の武夫さんが見ていました。

育種に魅せられ独立 「和ばら」ブランドへ

親子3人でバラの栽培に励んでいた昭和56年ごろ、啓司さんはヨーロッパで視察した育種という新しい分野に興味を惹かれました。

父の息子という重圧を 超えた兄弟の挑戦

バブルがはじけて大変だった時、武夫さんはオランダの種苗会社の日本代理契約に成功し、平成27年には現在の株式会社を設立しました。

武夫さんは「父はいわゆる業界の有名人で、その息子というプレッシャーはとても大きかった。父と違つことに挑戦したことで解放された気がします。兄

家族もバラ園敷地に育種用のハウスを建てて応援してくれましたが、広大なバラ園を経営し

ながらの育種はとても難しいこと、武夫さんには立派な後継者が育っていたことから、啓司さんは平成15年に國枝バラ園から独立しました。

育種農家として独立したバラ園では、啓司さんの開発した新品種を「和ばら」としてブランド化。全国へ出荷するようになりました。



上原 よしゑさん(母) 池坊華佑会支部 顧問

創業25年と歴史は若いながら、「分析」という技術でさまざまな環境を支える企業を経営する、山本康人さんと司さん親子。父子ともに理系知識も科学技術も専門外。理系と文系、自然と科学、父と子、さまざまな調和が人々の「安全・安心」につながっています。

豊かな自然と暮らしを守る科学技術 調和のとれた「守山らしい」発展を



自然も生活環境も 分析技術で守る

悠大なびわ湖、野洲川の流れ、市街地を飛びホタル、青々とした田園の広がり。守山に住む人たちは、昔から美しい原風景を大切にしてきました。

直接的な環境分析だけでなく、食品の残留肥料や工業製品など市民の生活に関わる分析も含め、さまざまな「環境」を守る会社を経営しています。

山本さん父子は、守山に本社を置いて、水や空気を、土壌など

これは、会社の維持と発展を模索する経営努力の結果、分析できる品目や項目が増え、総合的に市民の環境を守る会社につながってきたのです。

危機感を拭く挑戦で 技術と専門性を高めた

創業者から会社を引き継いだころ、ダイオキシンやアスベストなどが社会問題になっていました。「環境」というキーワードが先行して同業社が増え、競争が激しくなりました。

危機感を覚えた康人さんが何をしたかという点、精度の高い分析機械を導入したり技術者の分析技術を磨き上げたりして、

専門性と実績を高めていくことでした。努力の結果、日本全国や海外からも分析依頼を受けるまでになりました。

田舎と都市、自然と科学 調和で未来は明るく

康人さんに遅れること7年余り、東京から帰郷した司さんが入社しました。2人とも科学分析とは無縁の文系だったので、「なんで？」と聞かれることがあるといいます。康人さんの答えは「理系の専門技術者が存分に能力を発揮できる環境を整えるための目配りには、文系が向いていると思うから」とのこと。

さらに、康人さんは「親子で仕事ができる幸せ。将来は、わが社も小惑星探査機はやぶさのような、今よりもっと高いレベルの仕事をするのが夢です」と抱負を話していました。

山本さん父子は、「守山は人もまちも、よい意味の田舎を残しながら都市の利便性を併せ持っています。北の玄関口で見る湖岸のロケーションも、ゆったりとした郊外の住宅地も資源です。

環境も食品も工業製品も分析 もっと高い専門技術を目指していく

田舎と都市、自然と科学、行政と民力など、さまざまな調和から、守山らしい活性化と発展につなげていけば未来は明るい」とまちを分析していました。



山本司さん(息子)
株式会社テクノサイエンス



山本康人さん(父)
株式会社テクノサイエンス

情緒ある中山道守山宿。町家の行まいを残す「鶴屋吉正」は、和菓子屋と陶芸ギャラリーが仲良く来客をおもてなししている店です。七代目店主の小宮山督夫さんはサラリーマンをしながら、妻の美恵さんは陶芸家をしなから夫婦が手を携え、家族が助け合って老舗の暖簾を守っています。

和菓子と陶芸は伝統と創作の手仕事 歴史街道の鴛鴦が守る老舗の暖簾



小宮山美恵さん(妻)
陶芸作家 美秀

一足の草鞋と家族の助け 受け継いだ老舗の在り方

「鶴屋吉正は東門院との関わりが深く、少なくとも1804(文化元年)の資料が存在しています。13年前、店を改装する際に古い文書や意匠などの資料が見つかり、暖簾や包装紙として復活させました。

督夫さんは六代目店主の父を手伝いながら、和菓子づくりを覚えしました。父子二代、和菓子

職人(店主)とサラリーマンの二足の草鞋を履きながら、店の暖簾を守ってきました。

パートナーや子どもたち、家族総出で家業を支えるのが「鶴屋吉正」の当たり前でした。

夫婦二人だからできた かけがえのない相棒

結婚後に陶芸家となった美恵さんは、一足の草鞋を履く督夫さんが帰宅してすぐに和菓子づくりができるように餡を丸めて準備しておくなど、陶芸家と和菓子店女将と母親の3役を担ってききました。「妻は本当によくやってくれています。二人でなければとても無理だった。かけがえのない相棒です」と督夫さんは振り返ります。

陶芸と和菓子づくりは同じ仕事なので通じるものがある、と令和元年に美恵さんは京都で

和洋菓子の製法を学び、陶芸家の感性を生かして和菓子職人まごころなすようになりました。

街道とまちの歴史を おもてなしの二つに

飛び交うゲンジボタルをイメージした「ほたる団子」の創作をきっかけに、督夫さんは「父の手伝い」から和菓子職人に目覚め、フルーツ大福などの和菓子を創作するようになりました。そして、店を改装したころからゆっくりと督夫さん夫婦に代わりました。

改装後は町家の雰囲気を残しながら陶芸ギャラリーも兼ね、和菓子と伝統工芸が仲良くお客の目を楽しませるようになりました。

中山道守山宿で、老舗の暖簾を守り続けてきた鴛鴦夫婦は「守山は守山宿をはじめ、隠れた

古典意匠を暖簾で復活 宿場の情緒と「鶴屋」の名は未来まで

50年先の未来まで、「鶴屋」もそんな場所でありたいと思っています」と話していました。



小宮山督夫さん(夫)
鶴屋吉正 七代目